



栃木県建設業の父祖 齋藤東太郎の墓碑

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

大 谷資料館を出て、宇都宮駅行きのバスに乗る。すでに、昼時を過ぎていたので、このまま宇都宮餃子を食べに行きたいが、その前にもう一つ寄るところがあった。バスを伝馬町で降り、停留所から北へ三〇メートルほど歩いたところの桂林寺へと向かう。桂林寺は「寛政の三奇人」の一人、蒲生君平の墓があることで知られるが、栃木県の建設業を語るうえで欠かせない齋藤東太郎の墓もあることは、まず知られていない。

栃木県における土木業界の草分けは、現在の神奈川県川崎市で生まれた小西清次郎が、塩谷郡大宮村（現・塩谷町）に興した大宮組だった。大宮一家は、親分の小西から盃をもらった者が、大宮姓を名乗るという特徴があった。自分は、五〇〇から一、〇〇〇名といわれ、「明治時代、大宮一家でなければ土木工事の請け負いはできなかった」という。しかし、この小西をはじめ、小説『昭和の老侠 大宮源次郎』のモデル大宮源次郎、栃木県建設業協会の前身である「栃木県土木建築請負業組合」初代組合長の大宮久次郎など、業界の大物たちの父祖ともいべき人物が、齋藤東太郎だったという。

さて、桂林寺本堂の左をぬけると墓地があり、その中ほどに齋藤の墓碑がある。大きな碑で、『栃木県

建設業協会史』の編纂に当たった丸山光太郎氏の『野州土方の物語』の記述を借りれば、「基礎は鬼怒川産大玉石を錬積にしたもので、幅は三メートル余り、高さは地上より六メートル位であった。その上に雅致に富んだ大谷の自然石が敷いてある。その石も幅三メートル高さ一メートルもある。碑文の書いてある石は、仙台石であろうが、これも自然石である。その総高さは三メートル位であり、小西清次郎をはじめとする部下たちによって建てられた。

齋藤は、文政八（一八二五）年正月に南蒲原郡中之島酒井村（現・新潟県見附市）に生れた。本名は長谷川藤太郎といい、信濃川流域の開墾を志していた。そんなおり、開墾工事の視察に来ていた宇都宮藩士の県六石と出合い、宇都宮藩の開墾工事に従事することとなる。その後、工事頭となるが、塩谷郡上沢村（現・塩谷町）の工事中、村長だった齋藤某が出奔してしまい、その家が絶えようとするのを見かねて家督を継ぎ、姓を齋藤、名を東太郎とあらためた。

文久二年（一八六二）年になると、宇都宮藩は歴代天皇陵を修復することとなった。齋藤は工事頭を務め、士分に取り立てられており、「旧幕時代は乗り打ち御免を許され道中するのには烏毛の槍を立てて歩いて居りました有名な土方の頭」だったという。明

治を迎えると、旧宇都宮藩領ばかりでなく、福島県の阿賀野川の開削、宮城県の工事などで実績をあげることが、都賀郡生井村（現・栃木県小山町）の水防工事の後に病に倒れ、明治二六（一八九三）年九月に六九年の生涯を閉じた。

齋藤の足跡については、墓碑文と県六石の日記などがよすがとなり、『野州土方の物語』にまとめられている。



齋藤東太郎の墓碑

【交通】JR宇都宮駅からバスで約5分。
伝馬町で下車徒歩約5分